

# 美味しい「コシヒカリ」の移植栽培基準

540kg穫り収量構成の目安

収量構成	目安
㎡当たり最高茎数 (本)	533
有効茎歩合 (%)	75
㎡当たり穂数 (本)	400
平均一穂粒数 (粒)	70
㎡当たり着粒数 (百粒)	280
登熟歩合 (%)	87
玄米千粒重 (g)	22.5

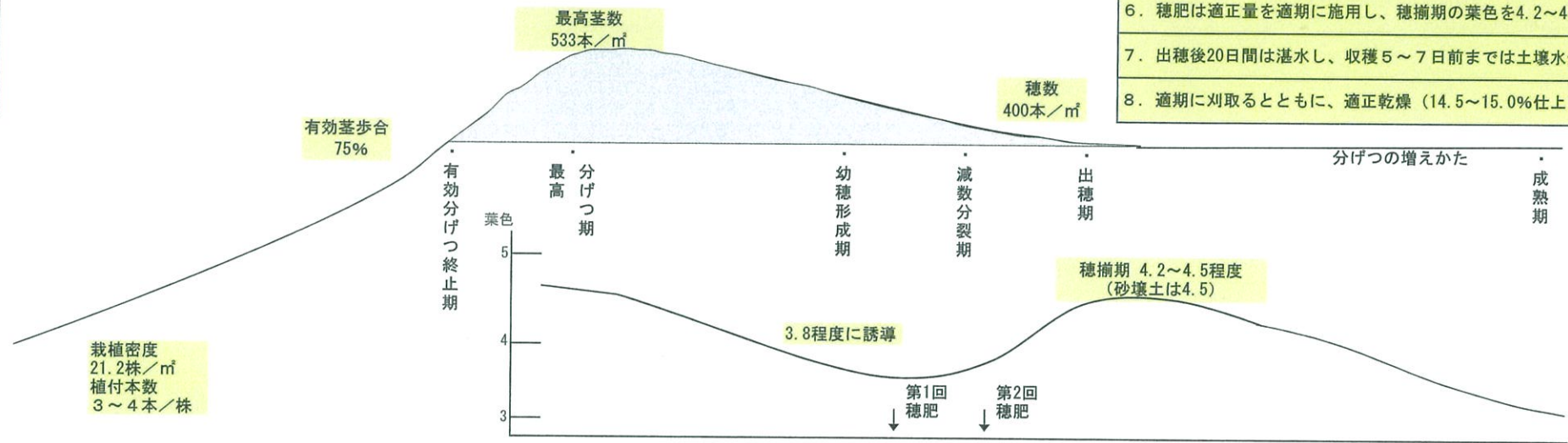
土壌区分別施肥設計 (kg/10a)

施肥	土壌区分	チッソ施用量		三要素合計			
		基肥 (側条施肥)	穂肥	チッソ	磷酸	加里	
分施	沖積 砂壤土	3.0~4.0	1.5	2.0	6.5~7.5	7.0~9.0	8.0~12.0
	洪積 赤土、黒ボク	2.4~4.5	1.5	1.8	5.7~7.8		

施肥	土壌区分	肥料名	施肥量	三要素合計		
				チッソ	磷酸	加里
基肥一発	沖積 砂壤土	Jコートコシヒカリ1号	30~35kg	6.3~7.4	2.7~3.2	5.4~6.3
	洪積 赤土、黒ボク	Jコートコシヒカリ2号	25~35kg	5.3~7.4	2.3~3.2	4.5~6.3

栽培のポイント

- 育苗日数20日間、ハウスの温度管理に注意して、健苗を育成する。
- 5月15日を中心として、好天日に田植えを行う。
- 株数は、坪当たり70株を植え、良質の茎を早く確保する。
- 適正な中干しにより根の活力を高めるとともに、過剰分けつを防ぐ。
- 幼穂形成期の葉色を3.8に誘導し、以降は飽水管理で葉色低下を防ぐ。
- 穂肥は適正量を適期に施用し、穂揃期の葉色を4.2~4.5に誘導する。
- 出穂後20日間は湛水し、収穫5~7日前までは土壌水分を維持する。
- 適期刈取るとともに、適正乾燥(14.5~15.0%仕上げ)に努める。



月日	4月	5月	6月	7月	8月	9月
生育期区分	4/25	5/15	6/15	7/13	8/5	9/13
生育期	育苗期	田植期 活着期	有効分けつ期	無効分けつ期	幼穂形成期 ~穂ばらみ期	登熟期
水管理		やや深水 浅水管理	中干し	間断かん水	飽水管理 (足跡の水が切れないように管理する)	出穂から20日間は湛水管理 (落水を急がないように)

栽培管理のポイント

- 秋耕を行い、必ず排水溝を掘る。
- 稲わらの腐熟を促進するため、一〇〇〜二〇〇kg。地力増強に努める。
- 珪酸石灰は一〇アル当たり
- 一・九ミリのふるいで選別する。
- 胴割米や過乾燥米の発生を防止。
- 仕上水分十四・五〜十五・〇%を厳守し、黄化率八五〜九〇%程度で適期刈取る。
- 刈取り予定日の五〜七日前までかん水。
- フェーン時はかん水して、乾燥害を防ぐ。
- 出穂から二十日間は湛水状態を保つ。
- カメムシ類は穂揃期防除を中心に確実に行う。
- 穂いもちは出穂直前と穂揃期に二回防除。
- 穂揃期の葉色を四・二〜四・五に誘導。
- その七日後に二回施用する。
- 穂肥は出穂十五日前と
- 幼穂形成期以降は飽水管理を行う。
- 幼穂形成期の葉色は三・八程度に誘導。
- 高めるとともに、過剰分けつを抑制。
- 適正な中干しにより、根の活力を
- 水のかん排水の効率化を図る。
- 六月一月中旬から溝掘りを行い、分けつの発生を促す。
- 活着後は浅水管理として
- 田植後はやや深水として活着を早める。
- 三cm程度の深さに植える。
- 一株の植付け本数は三〜四本とし、良質の茎を早く確保する。
- 株数は坪当たり七十株を植え、基肥量は地区基準量を守る。
- 五月十五日を中心とした田植え!**
- 葉いもち予防のため苗箱施肥を行う。
- 育苗ハウスが二十五度以下になるよう管理。
- 播種量は一箱当たり一〇〇g以下。
- 育苗日数は二十日間を目安とする。
- 播種日は四月二十五日を中心とし、十分に浸種して芽出しを確実に進行。
- 田面の均平を図る。
- 低速で耕起し、作土十五cm以上を確保。